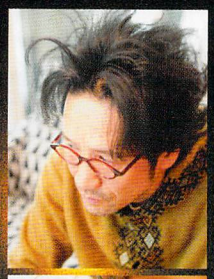
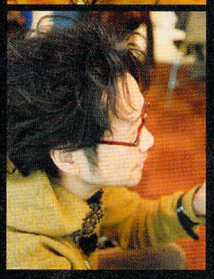
The Real Face

取材・文／竹中　聡（本誌）　撮影／畑中勝如
取材協力／京都シネマ　SØHOLM®CAFE＋DINING





遠藤賢司

えんどう・けんじ

黒いグレッチのエレキギターを銃がわりに風車小屋ならぬ武道館に挑んだ男

構えた黒いグレッチは銃のようだ。少なくとも、人の形をした相手の姿はない。だがその数を確認するように、360。見渡し、フィードバックで応戦。アンプを蹴り倒し、それでもまだ納まらない。まだ足りた京阪電車も路面電車じゃなくなっちゃったよね。あれもショックだったなぁ。車で来たときに『あれ？何か足りないなぁ』と思ったら軌道敷がなくなってた。どっちも好きだったから」。

初めての京都の記憶、そして変化を思うのは、振動と、音だった。これも「純音楽家」という職業柄か。音だって、立派な振動だ。ら」。言いたいことがシッカリしてたら、どんな簡単な言葉でも脚本なのだ。音楽にしろ映画にしろ、自分が解っていないから、疑問を投げかけるようなものや、上の方から「こういうのがあるんだよ、君たち」というものは大嫌い。「どんな人でも哲学者であり、芸術家であるわけだから。あるとしたら『オレはこう思うんだけど、どう？』「うん、勝ったね。出来上がりを観た時に『あぁやったなぁ。こりゃ良い映画だなぁ』って」。

哲学・芸術・価値観…。モチーフとしての言葉は違うが、遠藤賢司に対して確信できたことはひとつだ。簡単過ぎて使いたくない言葉だが、それはコミュニケーションである。反応がダイレクトではないもので

'47年1月13日、茨城県ひたちなか市生まれ。職業、純音楽家。大学時代、ボブ・ディランの「LIKE A ROLLING STONE」を聴き、ギターを手にする。'69年「ほんとだよ／猫が眠ってる」でデビュー。吉田拓郎らとともに、フォークシーンで頭角を現すが、同時にドアーズやジミ・ヘンドリクスらにも多大な影響を受け、当時からロック的アプローチを試み、'88年には、後に子供ばんどの湯川トーベン、頭脳警察のトシらが加入するスリーピースバンド「エンケンバンド」を結成。当時フィーチャーされたパンク・シーンにも顔を出すように。監督・主演・音楽（脚本）を担当した同作品は、元サニーデイサービスの曽我部恵一、銀杏BOYZやサンボマスターらの若手からも、絶大な支持を受けている。
http://www.enken.com/

ない。狂戦士の形相でトドメを刺そうとする。

「不滅の男 エンケン対日本武道館」と題された映画が、昨秋より全国各地で公開された。武道館内に富士山を模して山と積まれた200台のアンプの前で、出演者はただひとり、観客も居ない。13曲を唄い上げる、エンケンこと遠藤賢司の姿が延々と映し出される。同じくセットに設えられたドラムステージに続くあぜ道は野戦の様相か、弦を滑らせるピックの音は戦闘機の滑空音か。上映時間83分を戦い抜き、自転車に乗って武道館を去る。勝ち目はない。憮然とした表情で通路を抜けた勝者の姿があっただけである。

風車小屋ならぬ武道館に闘いを挑んだ男。だが彼はドン・キホーテほど愚かな男ではなかった。何故なら、武道館相手に勝利をおさめたのだから。

京都で同作品は「京都シネマ」にて公開された。その初日、舞台挨拶前にインタビューを受けてもらった。

蝉の声、市電の走る音と振動 それが京都の原体験だった

まずは京都との関わりから訊ねてみる。「7月に曽我部恵一君と弾き語りライヴで拾得、11月には磔磔でバンドでやりました。ここのところよく来てますね。ライヴハウスがいいとこあるから。音がイイんだよね」。'69年のデビューから現在まで、恐らく何度も訪れたであろう京都。その最初の記憶は？「35～6年前になるかなぁ。京都シルクホール（現・京都産業会館）まで行ったんだよね。ガタゴト～ンって市電に乗って。市電って、なくなっちゃったんだよね？もったいない。あと円山の音楽堂でやったときは、それはライヴ盤に残ってるんですけど、蝉の声が凄かった。唄うたんびに『ミ～～ン』って蝉の大合唱なの。そうだね、蝉と市電の車輪の音かもしれない」。

以来、京都が変わったと思うことも「やっぱり市電だね～。市電がなくなったことは、絶対未来に禍根を残すと思うんだけどね。大きなことだと思うよ。蹴上を走って

「本場」はそれぞれの心の中にある それを持って生きることは、対決だ

この映画について、凡夫は「奏者」を生業とする以上、無観客というのはいくら企画であったとしても、歓迎すべきものではないのでは？と思ってしまった。だが「ミュージカルとかサッカーとか、ロックでも、みんな向こう（海外）が本場だと思ってる人も多いと思う。でも、全ての本場は自分の心の中にあると思うんだよね。オレはそれを『創造する魂・創造魂』と呼んでいるけどね。それを持って演奏するということは自分との対決なんだ。だから武道館だろうがどこだろうが、観客がひとりであろうが百万人いようが同じ。聴いて欲しいのは寂しいから。でもだからって、絶対曲げちゃいけないのは、『創造魂』に対して、絵柄があるじゃない？一曲一曲に映画みたいに絵柄があって、それを言葉と音にして、どこまで血肉化し描けるか。それをオレは責任感と呼んでるけど、それがプロとアマの違いだと思う。プロはやっぱりその映像をどこまで追求できるかってことだよね」。

映画のエンドロールには「監督・主演・音楽」に加え「脚本」とクレジットされている。「『ありがとう』という言葉でも言い方や環境で違うし、その時々で色んな意味が凝縮されてると思うんだ。オレはそれを『宇宙』と呼んでいる、だから歌詞を書いている時には、その宇宙をどれだけ込められるかが勝負。脚本も同じ」だからである。

「その宇宙の根源はプラスとマイナスでできてると思ってて、それがギリギリの均衡を保っている。それはスクリーンを観ているお客さんとオレとも同じ。『ありがとう』とオレが唄う。聴く人は自分の実体験を通して『あ、これかな？』って推し量る。そうしてギリギリのバランスをとる。それがギリギリの対決なんだよ」。つまり「音楽」の中に脚本は含まれるのである。

「脚本ってのは骨だけで良いと思っている。特に台詞は、その台詞と台詞の行間に凝縮された濃密なものがなければ成り立たない。だからなるべく脚本も詞も、簡単な言葉がいい。でないと知識のひけらかしになっちゃうかっていう、相手に解答を残すことだよね」。

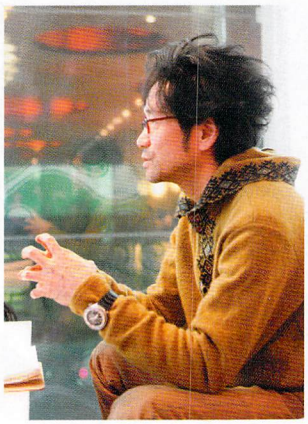
歌も雑誌も、寂しいからつくる でなければ人前に立つ必要はない

人は音楽や映画や文章をつくる。それは迷いの無いマスターピースであるべきだ。だから自分以外の存在に反応を求めたい。「いざやってみると武道館というハコは大きいし、終わった後に拍手がないってのは凄く怖かった。（ドイツW杯出場を決めた）日本代表の北朝鮮戦を観て、『あぁ、この気持ち解る』と思ったもの。ゴールを決めても『シ～ン』としてるのはやっぱり寂しいですよね。反応を求めないってのは全く意味がないんだよ。あなただって、原稿を書いていて、自分の為にやってることとは言え、彼女に褒められると嬉しいでしょ？（笑）」。

人の価値観は、哲学と言い換えても良い。昼にラーメンを食べるか、うどんにするか。これを選ぶのも哲学の一部である。「そのとおり。その選択はその人にとって偉大な歴史だよね（笑）。『カレーかラーメンか』って言いながら『ん～～っ』って悩むのも、努力じゃない。『カツ丼もいいな～！』って（笑）。いや、ホントに重要なことだと思うよ。『何を食おうかな』って悩むことは、DNAを塗り替える葛藤だと思う。それを描けたら最高の芸術だよ」。簡単な例え話に予想外の大きな反応が返ってきた。全ての人間は哲学者であり、その発露が音楽であったり映画であったりするわけだ。「そう。車の運転であったりね。だから発露するんだったら、自分の哲学はハッキリ言って欲しいよね。押しつけや偉がりじゃなくて『オレはこう思うんだ』ってハッキリ意思表示をしたら、相手から反応が返ってくるんだよ。その覚悟を持って欲しい」。

「同意」「反発」「愛し合い」「罵り合い」…主観のぶつけ合いこそが、大切なんだ

映画の中で彼が唄う13曲は、全て異なる曲調や歌詞を持つが、一本の脚本として繋がっている。「83分間ひとりでもたせるのは大変だったけど（笑）」。でも、勝った？



も、「同意」「反発」または「愛し合い」「殴り合い」「罵り合い」…、どんな呼び方をされてもいい。「オレはこう思う。君はどう思う？」という「主観のぶつけ合い」の戦いなのだ。

だから解る。無観客はライヴではない、映画だから成立するのだ。武道館に人はいなくとも、映画館には反応をくれる人がいる。己の価値観を83分に目一杯込めて、スクリーンを通して世に問うのだ。その反応が拍手だとしても、ブーイングだとしても、必ず反応がある。彼はそう信じているに違いない。

大好きな喜劇に昔ながらの特撮…。次に遠藤賢司の手によって生まれるかもしれない映画の構想もある。我々としては、そこに京都も入っていて欲しいと願う。「京都はね、定食屋がいいね（笑）」。昨夏に京都に来た時には「インディアン（P.50）」にも行った。「あ、インディアンもいいね！美味しかったよ。あそこ使いたいなぁ。市電も特撮の中で復活させたいね（笑）」。

次回作に夢は尽きないが、遠藤賢司の価値観に敬意を表して、最後は主観を彼にぶつけよう。映画の最後に勝者である彼はこう言った。「最後まで観てくれてありがとう。またね」。

「またね」。そう、次があるなら。武道館が再戦を望んだら、まず貴方はそれを受けて立つべきだ！

information

©アルタミラピクチャーズ

「不滅の男 エンケン対日本武道館」
1月2日(月)～1月6日(金) ■札幌 シアターキノ
※2日、3日遠藤賢司監督舞台挨拶
3月、凱旋上映 ■東京 下高井戸シネマ

2005年／日本／35mm／カラー／ビスタサイズ／ドルビーデジタル／83分
製作・配給 アルタミラピクチャーズ
http://www.fumetsuman.com/

■映画オリジナルサントラCD 全13曲
「不滅の男 エンケン対日本武道館」 発売中
定価2500円（税込）
AM-004 発売元／アルタミラミュージック

■キングの音源を集めたCD 4枚組スペシャルボックス
「キングオブワッショイ」12月28日発売
定価7500円（税込）限定2500部
KICS-8139~42／キングレコード

■待望の新譜アルバム2006年3月15日発売予定（ミディレコード）